

# 言語に懐かれてある存在

## Being as Embraced in Language

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際基督教大学教育研究所研究員

Research Fellow, Institute for Educational Research and Service, International Christian University

**Keywords** 文, 述語性, 場面, 時枝誠記, 生体情報処理  
sentence, predicate, scene, Motoki Tokieda, biological information processing

### ABSTRACT

日本語では、その述語性と場面性の優位によって、表現が曖昧になる傾向があり、曖昧さをなくし、普遍的な表現を追求することが推奨されている。言語に普遍性を求めることは、情報処理心理学を基盤とする科学的言語学が、言語の本質を普遍文法に見ることと同調的である。しかし述語性と場面性に包まれることで主語が定まり、そこに初めて主語・述語形式の文が発生するのだとすれば、文、命題、論理を出発点とする考え方は、言語の本来の姿を捉え損なっている。生体情報処理においても、論理的な計算の手前に、生理学的媒体としての脳が、まず述語性また場面性の働きを持ち、主語的なことがそれに包まれることとして成立してくる働きをしていると想定することができる。言語の発生史的な視点を取り入れることにより、生体情報処理をも含めて、あらゆる存在することが、言語に懐かれてあることとなったと理解することが可能である。

In Japanese, the expression tends to be ambiguous by the superiority of the predicate and the scene, and it is generally recommended to eliminate ambiguity and pursue universal expression. The search for universality in language is attuned to the fact that scientific linguistics based on information processing psychology considers the essence of language to be in universal grammar. However, if the subject is established by being embraced in the predicate and the scene, and the sentence with the subject-predicate form is generated for the first time there only, the idea which makes the sentence, the proposition, and logic a starting point for research fails to catch the original essence of the language. It can be assumed that the brain as a physiological medium first has the work of the predicate and the scene before a logical processing, and then the work of approving the subject's being embraced in the predicate and the scene is carried out in the biological information processing. By taking in the historical point of view of language emergence, it is

possible to understand that all beings, including biological information processing, have come to existence by being embraced in language.

## 1. 日本語における述語性の優位

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」(川端, 1952, p. 7)。

川端康成(1952)の代表作『雪国』の書き出しであるこの文をはじめて読んだ時、中学生であった私は、日本語は美しいと思った。

まだ行ったことのない裏日本の真冬、ひとり夜汽車に乗ってトンネルを通り抜ける。するとそこに白銀の峰々に抱かれた夜の雪国があった。真綿のような雪に包み込まれた銀世界の中へと、夜汽車とわたしが吸い込まれていく。

そんなイメージが心の中に自然と湧き上がってきた。雪のように冷たくしかし柔らかな心象風景が、この一文を通して、私の心の中に、言葉によって喚起された想像の世界として、彷彿と浮かんできたのである。

しかし『雪国』を翻訳した Seidensticker は、この一文を “The train came out of the long tunnel into the snow country” と、翻訳した (Kawabata, 1952/2013, p. 3)。

この英訳では、日本語の原文には欠如していた文の主語を補い、それを “the train” と明記してある。

このように主語の欠損している文は、基本的に述語だけで構成される。主語を伴わない述語は、論理的に見れば、不飽和な状態にある。主語が明示されないと、述語の言わんとすることが十分に表現されず、そこに不足している情報は読み手の想像に委ねられる。

文の読み手からすれば、述語のみで主語の不在した文は、情報不足からくる不確実性によって、そこに不安定に浮遊した感覚を見出さざるを得ない。

言い換えるなら、述語のみの文は、表現内容を限なく明示的に表面化させないので、意味の解釈が曖昧となる。その結果、書き手が何を言いたいのか正確に理解されず、曖昧さの残る部分が、推

量に委ねられるのである。

しかしそのような曖昧さは、裏から見れば、文の情報の不足している部分に対する、読み手の自由な連想を許容することにもなり、読み手の解釈の自由度を増大させる。

それとは異なり、契約の文章などでは、細部に至るまで文言を検討して、相互に誤解が生じないように厳密な記述をすることを目指す。しかし日常会話やまた小説や詩などの言語芸術の場合には、細部まで厳密に言葉で規定せず、ある程度自由な解釈を許容することで曖昧さを残しつつ、解釈に自由な想像力の働く余地を残す。

## 2. 「美しい日本の私」vs. 「あいまいな日本の私」

「美しい日本の私」と題したノーベル賞受賞記念公演で、川端康成は、日本とそこに生きる自己の美の世界を描いた (川端, 1969)。彼の作品は、日本語の散文によって日本的な美を表現する言語芸術だったのである。

すでに述べたように、日本語では述語的な世界を紡ぎだすことが可能であるが、その述語性によって、散文でありながら詩的なイメージの表現が可能となる。

たとえば『雪国』の冒頭の文に続く、「夜の底が白くなった」(川端, 1952, p. 7) という文は、詩的なイメージの表現としか言いようがない。

このような日本語における述語性の優位は、表現の曖昧さを許容することにもなり、さまざまな文化や社会に住む人々が、相互に共通理解を持って社会生活を営むためのコミュニケーションの道具としては、不向きであるとも言える。そこから、日本語表現の曖昧さを取り除いて、主語などの文の構成要素を補い、文の意味を明示化する必要性が指摘されることにもなる。

大江健三郎は、彼自身のノーベル賞受賞記念講演「あいまいな日本の私」(大江, 1995) で、川

端の受賞記念講演と距離を取った上で、曖昧さのない明示的な日本語表現の大切さを語った。大江は日本語表現が一種の普遍性を持ち、たとえ翻訳をされたとしても、内容が理解できることが重要だと考えた<sup>1</sup>。

確かに共通理解を困難にさせる弱点を持った述語性から不飽和性を取り除き、分かりやすく明示的な意味を持った文を使用することが有意義であることは論を俟たない。そのためには、述語性が優れた文に主語を付加し、意味を明示化する必要がある。飽和した文のみが、明示的に意味を伝えることができるからである。

しかしここで、さらに別の観点から振り返ってみると、文の主語・述語形式が飽和した形で成立したのは、じつは述語性が主語を迎え入れて包み込んでいく「慈愛」のプロセスの結果であった可能性があるのである（川津，2021）。

存在することは「あれ」という超越的述語的語りかけによって抱かれて「ある」こととなったのであって、その語りかけに抱かれて在ることの自覚が、「わたしが在る」という文の成立だったという推論も可能なのである。

そのような観点からすれば、述語性の優位は、単に曖昧さの温床として退けられるべきではなく、原初的な意味と形式のアマルガムとして、そもそも意味を汲み出してくる源泉だったと言えるのかもしれないのである。

### 3. 言語の普遍性を追求する文学と科学

言語に普遍性を求める文学の傾向は、科学的な言語研究と共鳴した方向性を持っていた。認知を情報処理過程と見なした認知心理学が隆盛を極めた時代に、Chomsky（1957）によって幕を切って落とされた言語の科学的研究は、普遍文法の原理を探究するものであった。

この時代には、脳の情報処理を示す研究が次々と発表された。例えば、Hubel & Wiesel（1963）は、ネコの脳の視覚野の神経細胞に差した微小電極の測定から、視覚野の細胞が決まった方位の刺激に対して選択的に反応することを発見した。

さらに計算の理論が成熟しコンピュータが実際に製作されたことで、情報処理のシミュレーションが現実化した。その流れの中で、Marr（1982）は視知覚を工学的な情報処理の理論として提示した。そして科学的な言語学においても統語論が言語の論理的な原理と捉えられたのである。

ところが、普遍的な文法という概念に包摂された統語論では、述語のみでは文とは見なされない。明示的な意味を持つ文は、基本的に、普遍的な論理的原理を反映する普遍的な形式を備えているべきなのである。

このように、言語に普遍的な論理性を追求するモチーフは、文学の世界と科学の世界に共通するものであった。しかし自然科学はそれ自体の問題領域の外側に対する関心を持たず、視野が限定されており、普遍的な論理性の存立の始原を根源的関係性に求める文学的な視点がない。したがって、文学への要請は、必ずしも科学の探究とは同調できない深い射程を持っている。

とするなら文学は、それが問う始原の物語をどこから開始するべきなのだろうか。

### 4. 文の始原へ遡る

論理的な経験の世界へ歩み入るとき、論理以前の経験は忘却される。論理以前からの卒業が、論理的な思考を言語によって表現できる成熟した人間になることだからである。

国語教育においても、日本語表現の論理的な不安定さを克服し、より普遍的で論理的に表現できる力を育てることが重要な目標とされてきた。そこには英語に代表される西欧言語に対する一種のコンプレックスが隠れていたのかもしれない。

しかし論理以前から出立するとき、人は論理以前の経験の豊穡さを忘却する。そこで失われる原初的経験の回復を、東洋的な思想に求めようとすることは、必ずしも間違った試みではない。

論理を起点にするなら、論理の世界がそもそも登場して来た原初的経験の来歴は語りえない。原初にあったはずの根源的肯定は、論理の世界ですでに存在の深みへと沈澱してしまっている。

とすれば、原初的根源的肯定への遡源は、論理性との親和性が強い西欧諸言語よりも、むしろ述語性に富んだ日本語の方が達成しやすい課題なのではないだろうか。

経験世界に意味を付与する根源的肯定へと還帰し、そこから再度歩み直して経験世界の成り立ちの歴史を振り返ることは、論理以前の経験から論理的な世界が登場してくる物語を、まさに述語性とその不飽和性を満たして行った日本語表現の成熟の歴史と、二重写しにするのである。

根源的肯定との出会いは、述語性とその不飽和性を満たしていく経験の現象学的記述として可能なのである。それこそが日本文学が日本語表現の成熟の歴史において成し遂げようとして来たことなのではないだろうか。

## 5. 述語から文へ

文には主語的同一性への指向と述語的同一性への指向がある。主語的同一性の指向は、中心から周辺へと向かい、述語的同一性の指向は周辺から中心へと向かう。

主語的同一性は、主語の同一性の安定化を指向するが、それは論理的一貫性の基礎となる。それに対して、述語的同一性は、述語が関係性を表現することから関係性の安定化を指向する。それは、述語性の同一性の探究というよりも、むしろそれが場面的受容的に包み込もうとする対象、すなわち述語にとって本来は他者であった主語の同一性を護るために、自己超克的に他者である主語の同一性を追求するという意味で、いわば母性的な包容なのである。

たとえば連歌では述語的な言葉が連綿と語られることで、浮遊する述語性の醸し出す母性的な時間的空間的場面において、参加する主体は厳密な自己限定が不在のまま述語的場面によって包まれることになる。

そこでは、包み込む場所としての場面的述語性が、それが包み込んでいく主語的なものに、いまだ確実に出会えないまま、述語性が浮遊していくのである。

それは、述語が自ら包み込んでいく対象としての主語の不在によって、いわば愛の不完全燃焼にも類似した、欠如した関係性への過剰な求めを、その目的が未達成のまま、感情の横滑りによって述語から述語へと遊戯のように浮遊し、対象不在に苦しむ慈愛が、自由連想によって自然発生的に広がっていくイメージの創出によって、生の意味の確認を模索し続けているかのようである。

それを主語的同一性の立場から逆照射すれば、自己同一性を見失ったかのような述語的な連想の展開に、一種の病的な不安すら見え隠れするアイデンティティの探究を発見するであろう。

それは愛の過剰であって、母性が愛する子を失った場合に、対象喪失によって愛がどこまでも浮遊するように、受容的關係の述語性は、場所的場面的包容のイメージを自由連想によっていつまでもどこまでも産出し続ける。

主語と述語の確定的な結合による、固定された主語・述語関係を持った文の成立は、その背景にこのような述語的指向性とその包み込む対象を探究する愛の遍歴があったのである。

とすればやはり、言語研究を統語論から始めるべきではないのである。文のシンタックスが確定する手前で、それを追求する同一性への旅路があったのだ。

述語的同一性指向の旅路が愛の遍歴の果てに、ついにその対象を見出し、それが主語となった。そして、主語は述語的同一性に包まれる形で、その場所的場面的受容性にあって誕生し、成長し、そこに安住の地を見出した。それによって初めて、そこに主語的同一性指向が主語・述語形式の文として成立したのである。

それは意味を求める場所的で空間的な述語が時間的な遍歴をする中で、その求め続けていた意味空間の充溢が、文という形式に結晶し析出していくプロセスであったとも言えよう。

言い換えるなら、主語・述語関係としての文が、その形式を完成できたのは、それまでの長きに亘る述語的受容性の遍歴の果てに、ついに文の形式が、いわば求め続けていた愛の結晶として結実していったことによるのである。

日本文化は型の文化といわれる。型は単なる形式ではなく、型であることにおいて意味を持っている。文の形式は意味空間の探究の果てに発見された意味と形式の結晶として、いわば型なのである。

## 6. 場面に包まれてあること

述語が主語を包み込んで文に結晶することは、場所的な根源的肯定によって包まれることでもある。しかし、これは述語と主語の結びつきの分析から言えることであり、必ずしも日本語に特徴的なことではない。

しかし、日本語には、名詞や動詞などの自立語である詞が、助詞や助動詞のような主体の立場を場面的に表す辞によって包まれてあるという構造があって、この文法の水準でも日本語に特有の場面に包まれてあることを見ることができる。

自立した語である詞が主体的な場面を表す辞によって包まれてある。あたかも花が花卉に包まれて美しさが際立ち、また絵画が額縁に入れられて価値が高まるように、自立的な言葉が場面的な言葉に縁取られることで意味を充溢させる。このように、包まれてあることは日本語文法の水準でも見出されるのである。

日本語は、対話する主体が存在肯定の模索を自覚している言語なのではないだろうか。述語性が対象としての主語を求めることは、肯定する対象を求めつつ自らも根源的肯定を希求していることであるとも言える。また、詞が辞によって場面的に包まれてあるのは、言葉がつねに肯定する場所あるいは場面を意識しているとも解釈できる。

本来対話は根源的肯定すなわち“Ja”の変奏曲であった。お互いが“Ja”の変奏曲を語ることで、述語的世界の豊穡さが出現する。そこに誕生する関係性の場所において主体性が成長する。そこに存在の隠れた本質がある。

会話をするとき人は控えめに語る。そうでなければ自己への過信が生じてしまう。人は相互に配慮することで相互承認を求めているのである。その背後には、不安定な自己の超越的受容への探究

がある。それが現在の場面では相互承認への希求となる。その探究を言語化する旅路において、受容性としての述語性と場面性が強く自覚されて構造化されたのが日本語なのではないだろうか。

## 7. 場面的媒体の浸潤

主語と述語の結合の背景は必ずしも自明ではない。不飽和な述語性が場所的場面的に主語を受容して文が成立した。述語性は主語に場所を提供しているという意味で、主語にとっては媒体でもある。また日本語では、詞と辞の関係において、場所的場面的な自覚が文の表面に構造化されているが、それは言語表現に場面的な媒体が浸潤してきていることだとも言える。

主語・述語形式が確定した文が普遍的に理解可能な文として成立し、そこから文章を組み立てていくことでさらに複雑な思想が表現可能となる。しかし日本語の特徴を見ると、文成立以前の述語性の優位にしても、成立した文における詞と辞の関係にしても、そこにはつねに場所的場面的な媒体が文に浸潤してきているのである。しかし、そのような場面的浸潤は、統語法が確定した文から普遍的意味を読み取る際には、もはや不要なものとなってしまふ。

成立した文では統語法に沿った形で意味も解釈されるので、そこに媒体的なものが浸潤しているかどうかは問題にならない。したがって日本語から英語に翻訳するときには、場面的な浸潤によって醸し出される文の雰囲気はほとんど省略される。そういった場面的な雰囲気は、文の成立以前の意味生成の旅路の苦しかった記憶の残響に過ぎないのであり、普遍的な言語理解からは捨象される。

しかしこの残響にこそ言語の本質を見出す鍵がある。そこにこそ、文の「形」がそもそも出現してきたときの原初的発生の歴史の名残が滞留しているのであり、いわばそれは生きている化石なのである。そもそもどこから意味と形式の統一体が出てきたのかを探ろうとするとき、その原初の姿がそこに垣間見えているのである。

とするなら、日本語が「あいまい」であることは必ずしも否定的に評価されるべきことではない。むしろそこにこそ、意味と形式の原初的のアマルガムがあったのであり、いかにして主語・述語の形式が登場し、それに続いて論理的構成が可能となる普遍的な言語世界が形成されたのか、その本来の姿を探る出発点はそこにこそあったのである。

確かに川端康成の文章には曖昧さがある。しかしその美の探究において、川端はむしろ美のさらに奥にある、本来的な根源的肯定を探究していたのではないのだろうか。彼は、述語性において美の世界を探究し、そこにある場面的受容性に身を委ねながらも、さらにそれを越えた深い肯定を希求する求道者であったのかもしれない。『雪国』の結末を読むなら、主人公はもはや美の世界に酔ってはいない。美の世界の劇的な悲劇性を眼の前にして、彼は自己がただの人に過ぎなかったことに気づいたように見える。

そこから始まるさらなる求道の旅に、彼が成功したのかどうかは、また別の話であって、少なくとも、彼が意味と形式のアマルガムの地点から出発して、本来の意味の世界を希求していたことは否定できないのではないだろうか。

とすれば大江健三郎が求めていたものと川端康成が求めていたものは、それほど異なるものではなかったようにも見える。述語性の世界から出発して慈しむ対象である主語を見出し、そこに主語・述語形式の文を成立させ、確固とした根源的肯定に立った思想を求めていたということは、二人のどちらにも共通して言えることではなかっただろうか。

## 8. 生体情報処理における媒体性の意味

前節において、文の主語・述語形式が、場面的場所的な述語性によって包まれてあることから始まる成立史を背景として持っていたこと、また文として成立した言語表現においても詞と辞の関係に見られたように、場面的媒体性が表現に浸潤してきていること、それらの二点を指摘した。この

ような言語における場面的媒体の浸潤と同様の現象が、脳の情報処理過程においても見るができるのではないだろうか。

生体ではハードウェアとしての組織が常に再生され再編成されている。そして計算の回路が増殖することで計算の可能性を広げている。また思考の空回りを服薬によって調節できることから分かるように、思考のプロセスが媒体であるハードウェアの水準から影響を受け得るのである。

情報処理の理論は計算の理論を基礎にしている。脳の情報処理が滞った場合に、ハードウェアからの影響で現実的に調節され得るということは、脳における情報処理が生理学的環境によって包まれてあるということだ、と言える。生体情報処理が停滞した状態で時間が経過し、その間に生じる生理学的条件の変化をきっかけとして、生体情報処理が再始動するとすれば、それは生理学的媒体の生体情報処理への浸潤であるようにも見える。

しかし、このように生体情報処理に対して生理学的媒体が浸潤しているのだとしても、このことが、上に述べた文の成立における場面的媒体の文の表面に対する浸潤と本質的に同じことであると、直ちには考えられない。

文における媒体の浸潤現象は、いわば、文の発生において意味と形式がまだ分離していなかった始原の状態の痕跡である。しかし生体情報処理では、生理学的媒体は計算のプロセスとは独立したものと捉えられているので、そこに生理学的媒体と計算のプロセスが渾然一体となっていた始原の状態の反映があるとは考え難いのである。

しかし論理的なプロセスというものがそれとしてあって、それとは別のもので生理学的媒体としての組織があるという前提は正しいのであるうか。

論理というものがすでに論理として定義されていれば、論理の世界はすでに成立したものであるとして理解されるので、それに対して浸潤することのできるものはあり得ない。この観点からすれば、論理的計算への生理学的媒体からの影響ということは、浸潤というよりも、単なる偶然的な計算の新

たな開始に過ぎないと言うべきであろう。実際、それは、コンピュータが止まったときに蹴飛ばしたらまた計算が始まったというようなことと、それほど異なっていないとも言えるからである。

しかしこの見方は、そもそも論理ということが完成したシステムであることを前提としている。すなわち論理そのものが原理的に浸潤不可能なのである。

この大前提に対して、上記の文の発生史、すなわち論理以前あるいは主語・述語形式成立以前の意味と形式のアマルガムからの文の発生史という視点から問題を考察し直してみると、脳において生起していることは、計算以前あるいは主語・述語形式成立以前の、場面的媒体性に包み込まれてあることが成立してくる過程であった、という理解も不可能ではないように思える。

すでに述べた文の成立の始原についての仮説が大きく間違っているのではないとすれば、形式と意味のアマルガムから場面的媒体に包まれる形で文が成立し、そこに成立した文における主語・述語形式を基盤として、さらにその上に文章を構成する形で命題の組み立てが出来上がったと考えることができる。

言語の普遍的な構造を論理的に解明することを出発点にするのであれば、脳の情報処理も基本的には論理的なプロセスとして理解されることになる。この方法では、われわれの思考は論理的な基盤に立って理解される。しかし、この方法はどこから論理が成立して来たのかということ、本来の問題として提起しようとしなない。

意味を形式に付与されることとして客観化し、意味論と統語論を区別して外在化してしまえば、原初的述語性における形式と意味の未分化だった状態は考察の対象とはなり得ない。

しかし、論理を前提として探究を始めることを止めて、むしろ文の成立の場合と同じように、脳の生体情報処理においても、場所的媒体という形式と意味のアマルガムであった包み込んでいく述語性の状態がまずあって、そこから始まる発生史によって包まれたものとしての〈主語〉が現れ、そこに〈主語・述語形式〉が誕生し、その結果と

して〈命題〉の形が出現し、その上で〈命題〉の複合によって論理的処理が可能となってきた、というように捉え直すことも可能ではないだろうか。

すなわち、脳は論理を実装するハードウェアなどではなく、それが生体であることからして、場面的媒体的な組織が述語的に働き、慈しむ対象としての〈主語〉を包み込んでいき、〈主語・述語形式の文〉が成立するという、いわば論理以前の発生的前史を生理学的に再現しているのではないだろうか。

その上で、そこに成立してくる論理的な構造によって、初めて論理の平面内での処理が可能となる。従って、そこにはもちろん論理的な処理も存在するのだが、それがそれとして始まっているのではなく、むしろ論理的構造の発生史の再現の結果として実現しているのである<sup>2</sup>。

## 9. 言語発生史的思考

心理学は論理を基盤として研究されてきた。実際情報処理心理学は、計算という論理的なプロセスを基礎としている。

しかし、日本語における論理以前の述語的場面的媒体性から、主語を包み込む形で主語・述語形式が出現してくる発生史を振り返って見ると、論理から出発することが本当に正しいことなのか、という疑問が吹き出してくる。

もしも脳においても、論理的な文が成立してくる発生史をたどり直すのと実質的に同様な意味で、生理学的な意味での論理的な構造の発生史的な事象が生じていたとするなら、もはや論理を出発点にするべきではないのである。つまり、コンピュータのハードウェアに計算のプロセスをソフトウェアとして載せていくのとは、全く異なる仕方、脳は機能している可能性があるのである。

生体が媒体として述語性の働きをするということは、論理以前の包み込む働きである。それは論理的に言えば、単なる偶然性に過ぎないことであろう。しかし、論理以前の現象を論理的に記述することは意味がない。

むしろ、述語性をそれに即して記述するなら、それはむしろ包み込んでいく慈愛として二人称性なのである。

とするなら、生体において生理学的媒体が二人称的な述語性の働きを為し、その包み込む動きが主語的なものを包み込んでいくところにまで生理学的事象が進展した段階で、初めて論理的な環境が成立し、そこでやっとコンピュータにも類比可能な論理的処理が可能となっているのである。

とすればやはり生体においても、場面的媒体性が論理的な世界へと浸潤しているという表現は間違っていないのである。

## 10. 結語に代えて

上述のように、脳が文の発生史と同様な現象を担っていたとしても、脳を越えた物理的世界全体は、やはり論理的分析がどこまでも可能な世界なのではないのだろうか、という疑問が残存する。

しかしこの問題について、物理的世界に対しても述語性の理論を拡張することが可能であろう。物理的世界にとって、述語的媒体性はその余白のようなものである。それを場面的媒体性と言い換えることも出来る。物理的世界の余白とは絶対者の痕跡のようなものであろう。それは論理的な観点からは単なる偶然性としか見られない現象を、物理的世界を越えた超越的媒体からの述語的な慈愛の働きとして見ることも繋がる。そこに絶対者の二人称性の痕跡が見え隠れするのである。

本論考で私は、まず川端康成の文章の曖昧さが、日本語における述語性の優位によるものであることを確認した。大江健三郎はそのような曖昧さを否定して、より普遍的な言語としての日本語を追求した。大江の普遍的な言語への追求は、Chomskyによる科学的言語学と共鳴する方向性を持っていた。両者とも言語に翻訳可能な明示的な論理性を見ようとしているのである。

しかし、文の発生が、述語性が主語を包み込んで主語・述語形式を完成させていくことであった、という発生史的な見方に立てば、文の始原は論理的ではなく、むしろ包み込む対象を求める慈

愛の場所的な述語性だったのである。そこから生体における情報処理を見直してみると、脳という生理学的媒体においても、場面的述語性がまず動き出し、そこから次第に〈文〉が成立してくる発生史の辿り直しが生起しているのだと、想定することも可能である。

そうであったとすれば、脳はコンピュータとは異なり、生体のハードウェアに論理的計算が実装されてあるということではなく、むしろ、その生理学的な述語的媒体性の働きによって、〈文〉の形式がまず成立し、それに続いて〈文〉の複合によって〈命題〉の複合した論理的な世界が出現している、とも考えられるのである。

この考え方は、そもそも一切の在ることが、論理の手前の述語性から始まっている可能性に基づいている。文が成立し論理的世界が出現する手前における始原からの物語は、述語的な媒体性の包み込んでいく慈愛の物語であった。

この考え方は人間原理ではない。科学的に客観的に三人称で語れば人間原理ではなく、二人称や一人称で語れば人間原理であると速断するのは、誤謬である。どの人称も人間の人称なのであるから、そのどれか一つを特別扱いすることには正当的な根拠がない。従って、人称を一般化して一般人称理論の枠組みを作成し、そこにおいて三つの人称を対等に扱うべきなのである。

とすれば、三人称的な客観的世界に、二人称の影あるいは痕跡を見出すことも可能であろう。それを二人称が三人称世界に浸潤してきていると表現するよりも、むしろ、二人称の包み込む慈愛によって三人称世界が出現して来た、その来歴を暗示するサインが現象していると表現するべきなのかもしれないのである。

二人称性が述語性によって語り出したとき、「言語に懐かれてある存在」として一切の存在が現れてきたという物語こそが、存在することの真理を開示する語りだと思われるのである。

## 注

- 1 大江健三郎は、河合隼雄と谷川俊太郎との鼎談(1996)で、

私は普遍的な言葉ということも考えています。そのことは一年間よく話してきたのですが、まず私には母国語で、マザー・タンクというか、母に習った言葉で書くということがある。しかも、私は自分が日本語で書いたものを、それを本当によく日本語を理解してくれる研究者が翻訳すれば、世界のどこにでもその国の言葉の文学として理解されていくというのを目指しています。そしてそれを普遍的な言葉というものだと私は考えているのです。(pp. 129-130)

自分に日本人としての折りということがあるとすれば、それを日本語で書く。それが外国語で訳される。そしてその国の文学としても通用してゆく、そのような言葉を書きたいのです。

もっとも、どうしても翻訳できない言葉で書く日本文学というものまであったわけなのです。私は幾つか、フランス語と英語で、翻訳文学賞の審査員をしているのですが、たとえば谷崎潤一郎の『卍』なんていう作品の英訳では、じつにどんどん省略してあります。そうしなければ普遍的にならないのです。

それから川端さんの『雪国』でも、有名なサイデンステッカーさんの翻訳では、いちばん最初の、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」などというところは、英語には訳されないのです。小説が始まると、すぐ女の人が「駅長さあん、駅長さあん」と叫ぶようになっていきます。

日本の近代文学は、こういうふうどこを押しても英語にはならないものを書いてきた。しかし、たとえば、西鶴は正確に訳されています。上田秋成も、源氏も、正確に、フランス語だっていちいちの文章が訳されているのです。ところが、近代文学というのはどういうわけか、省略するほかないような日本語を書いてきた。むしろ海外文学を知ったからだとさえ私は思います。海外文学とは別の、そんなもんじゃないものにしてしまったのじゃないか。外国人にはわからないようなことを書いてやろうと川端さんは思ったのじゃないか、と私は思います。(pp. 130-132)

と語っている。

- 2 生体情報処理において、論理以前の述語性に包まれる形で〈文〉が成立してくるという場合、〈文〉というのは〈文〉の表象を意味しているのではない。ここで〈文〉というのは、論理以前の発生史を辿り直す働きを語るための一種の方便である。生体情報処理における論理以前の発生史を語るための概念がないので、言語の場合に用いた概念を便宜的に使用しているのである。つまり論理以前の統語法的構成の発生について、〈文〉の成立と

いう考え方をメタフォリカルに適用したのである。

## 引用文献

- Chomsky, N. (1972). *Syntactic Structures*. Mouton.
- Hubel, D. H., & Wiesel, T. N. (1963). Receptive fields of cells in striate cortex of very young, visually inexperienced kittens. *Journal of Neurophysiology*, 26 (6), 994-1002.
- 川端 康成 (1952). 雪国 岩波書店
- Kawabata, Y. (2013). *Snow Country*. (E. G. Seidensticker, Trans.). Vintage. (Original work published 1952)
- 川端 康成 (1969). 美しい日本の私 講談社
- 川津 茂生 (2021). 同一性の起源 一何がそれを生んだのか— 教育研究, 63, 105 - 111.
- Marr, D. (1982). *Vision: A computational investigation into the human representation and processing of visual information*. W. H. Freeman
- 大江 健三郎 (1995). あいまいな日本の私 岩波書店
- 大江 健三郎・河合 隼雄・谷川 俊太郎 (1996). 日本語と日本人の心 岩波書店
- 時枝 誠記 (1942). 国語学言論 岩波書店